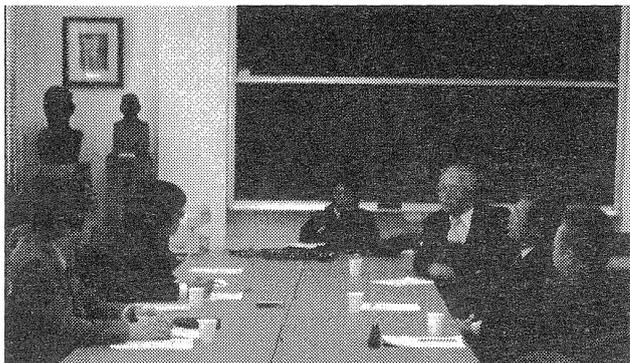


座談会 4: ゼネコンの経営者に聞く

DISCUSSION 4: the opinion of general contractor executives

参加者: 高木嗣郎氏(昭 37 年卒: 大林組常務取締役),
得田芳宏氏(昭 39 年卒: 松村組代表取締役社長),
堀田修二氏(昭 40 年卒: 鹿島建設取締役)
聞き手: 古阪秀三, 石田泰一郎, 伊勢史郎

□自己紹介を兼ねたゼネコン技術の過去と現在との比較



古阪 本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。座談会の趣旨は、日本のなかで建設産業が難しい状況にある、とりわけ関西がそうである、また、大学も改変の時期にある、建設産業は大学に何を期待されているのだろうか、このようなことをぜひゼネコンの経営者の方々に伺ってみようということでありませう。まず自己紹介を兼ねて、建設産業の技術的なことについて、昔と変わったことおよびその印象をお聞かせください。

高木 私は昭和 37 年に会社に入りまして、今年の 3 月で 41 年が過ぎたわけですね。自分の経歴的なことを多少言いますと、まず現場です。現場がのべにして 15 年くらい、それから現場支援のいわゆる施工技術の計画だとかを行なう現場支援の部隊に 6 年ほど、そのあと 20 年くらいが営業です。ただ営業といっても技術的なものも含めてで、立場は、営業が 7 で技術が 3 くらいでしょうか。建設業は現場ですから、そのやり方について考えてみますと、変わったものもあれば相変わらずのものもたくさんあります。特に最近はコンピュータを使って、ずいぶん設計だとか施工のための図面作成とか現場の管理だとかが変わってきていますね。ただコンクリートにヒビが入るとか、雨で水が漏れるというのは相変わらずです。

技術者である我々自身に関していえば、これも同じようなことで、変わったところもあり、相変わらずのところもあります。ごく最近問題になっているのは、現場をあまり見なくなったということです。語弊がありますが、自分で図面を描いて、それを自分で職人さんに指示を出して、それをきちんとできているかどうかを確認するというのが、ちょっとなおざりになってきているような気がします。なんか机に座ってコンピュータばかり見るとというような人も多少います。こう考えると管理の面が変わってきたんじゃないでしょうか。どうにかしていかなければいけません、どこの会社も同じ状況だと思います。

得田 私は 39 年卒で、高木さんの 2 年後に社会に出たわけですね。現場のことでいえば、いま高木さんがおっしゃったこととほとんど同じですが、少し付け加えさせていただきます。やっぱり

個々の IT 化にしても機械化にしても、技術者にしても、我々のところのように現場に非常に足を運んだものからみてみると変わったと思います。我々は自分で図面を描いて、自分で収まりをみて職人に指示を出すのが非常に多かったんです。しかし、現在では現場の技術者が監理者ようになっていて、職長に指示したら、それで仕事が終わっているような気になっている人が多く、ちょっとおかしいなって感じるものがよくあります。あと、安全関係は大幅に変わりましたよね。我々のころより死亡事故が大幅に減っています。作業員自身は、どういう表現をしたらいいのか難しいんですが、ヤクザな人間が少なくなって、まともな人間が多くなりました。肩や背中に自分の肌がなくて色がいっぱいついた職人がたくさんいました。

高木 我々も含めてですが、職人さんたちもサラリーマン的になっているんでしょうね。

得田 その代わりに、職人氣質を非常にもっている、そういう強い職人がいましたが、最近は素直でサラリーマンと変わらないのが多くなっていますね。一時期、作業員が高齢化していたのですが、最近若いのが入ってきた。バブルの頃は、年齢がグッとあがっていましたが、今は若いのが増えています。

古阪 職種はどのようなものですか。

得田 薦とか鉄筋とか型枠大工とか。バブルのころはもう最低で 45 才、45 才以上しかいなかったのが、今はけっこう若いのがいます。

古阪 本気でやる人間が来てますか。

得田 本気でやる人間が結構いますよ。そのへんがだいぶ変わったかなと。今の社会情勢の中で、働きの口が減っているのがあるのかもしれないですけど、私は割合朝早いんですが、その電車の中で、若くて茶髪でこのへんにピアスしているような人と会いますが、でも道具を見たら薦だと分かるんです。こういうところが変わったところです。

古阪 続いて堀田さんお願いします。

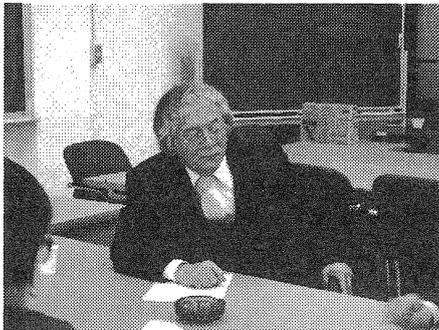
堀田 私は昭和 40 年に入社しましたが、ちょうど超高層ラッシュの時代でした。技術に関していうと、その頃と大きくは変わっていないと思います。そこに建設業の大きな悩みがあると思います。確かに、インテリジェントビルとか IT 化とかいろいろあるんですけど、ほんと技術的に大きく変わったものはあまりないですね。技術を開発していくために、官官、官学連携が必要だと思いますが、その目的は生産性を上げるとかコストを下げるロボット化などです。今、話のあった安全関係の話ですけど、昔に比べて非常によくなっています。理由は機械化や安衛法が非常に発達したこと、作業員の皆さんの進歩だと思っています。

ただ、今後どうなるかです、高齢化とか少子化とかありますから。もっと我々の業界、請負体質を変えていかないと生き残れないと思います。我々の業界は専門職になりすぎていますから、もっと視野を広げた集団を作っていくと、きっと生き残れないような気がします。そういうことを感じますね。

ロゼネコンの役割について

古阪 一般的に、施工側の重層化が進んでいます。設計のほうも、外注という言葉を使うからややこしいのですが、結構重層的な下請構造になっています。しかも、ますます進行している。工事だけに絞っても、元請がこれまで一生懸命やっていたことを、下請にだす相手ができたからだす、外注するということが進みすぎていくという危惧を私は持っているのですが。

高木 まあ、いわゆる施工者の協力会社が何次まであるかというのは昔と変わらないと思います。今、外注の話が出ましたが、例えば設計会社に対する外注というのは、我々の設計部の中での外注もありますし、現場の施工図の外注や現場管理をやる現場監督の外注をして、うちの社員と一緒にやっていくというもあります。それは世間の情勢が変わっていきまして、バブル華やかな10年以上前からどんどん外注を増やしていきました。猫の手も借りたいわけですから。ただ、現在は外に出るお金は抑えなきゃいけないので、外注を減らしていくという方針です。



古阪 そうおっしゃいますが、私は現在、外注がもっと進んでいると思うんですが、どうなのでしょう。

得田 特に施工図は外注の比率が高くなっているようです。当社等ゼネコンにおいた施工図担当者が新しい会社を作って、そこでどんどん施工図の外注を受けたり、韓国やマレーシア、フィリピンとかとやり取りしながら描かれる施工図が多いですよ。

堀田 もう増えざるをえないですよ。施工図を自社で描くという余力はないですね。経済的とか経営的な問題からですが、施工図の外注の方向の流れは止まらないですね。

得田 逆に経営者から考えるとね、うちの社員を使うより外注したほうが安いですからね。

古阪 まあ積算もそうなんですが、ゼネコンとして非常に大事なことが外に出ちゃってるんじゃないかと思うんですよ。最近では揚重の専門会社が「何でも屋さん」になってるんですね。電話一本で何でも手伝いますと。「揚重」とか「何でも屋さん」というのはゼネコン機能の重要な部分じゃないですか。ゼネコンとして今もしっかりとした技術がありますし、それを守るとすれば、無原則に仕方ないと言って外にだすのではなく、これは内部だということが戦略上あっていいわけですよ。ゼネコンのよりどころとして内部に何を残すのか、会社によって違うでしょうが、これは重要な課題だと思います。

高木 うちはしかし、基本的には先ほど申し上げたとおりに、できるだけ金を外に出さないという姿勢ですから。ただ、会社によって方針は違うと思いますよ。今おっしゃったような外注したほうが安くてよいものが得られるかもわからない。

得田 今の図面の会社の場合は、必ず図面をチェックしなきゃい

けないですね。ただこのへんがきちんとできていなかったら外注はできませんし、大事なことだと思いますけど。

堀田 品質保証っていう意味から、施工図は非常に重要なんですね。だから、教育の書き換えをやる必要があると思います。

得田 我々の会社に社員が入ると、少なくともローテーションをまわしてその施工図を描くことをやらせていましたが、その卒業生が結構外へ出てしまいました。また、請負金額は減っているのに、施工床面積は減っていないという現状があります。その請負金額にあわせて人を配属するもんだからどうしても忙しくなる。ということで自分で描く時間がないから外注したやつをチェックをするということで、実作業を減らしている感じはありますね。ただし、先ほどから出てますように、我々の業界からそういう部分を抜いてしまえば、会社のよさがなくなりますからね。まあその辺は確かに重要なところですよ。

堀田 同じ建物を管理する社員の数は我々の頃の半分です。いろいろな理由がありますが、以前10人で管理していたのが現在は5人程度になっている、そんな管理になっています。

得田 私も同じ考えなんですけど、あの当時は、例えば型枠工事だったら、材料支給で大工の労務だけをとる、したがって型枠を組ますためのベニヤも支給なら締め金具も支給、棧木も釘も全部支給だったんです。そのへんの管理まであの当時はやっていた。堀田さんが言うように、あの当時と比べるとそれらをまとめて外注しているところがありますから、非常に工事の質が変わっているところは確かです。

堀田 どっちが正しいかわからないんですけど、確かに減ってますね。

高木 まあよく言えば専門工事業者の質が上がっているということですね。

古阪 専門工事業者の質があがっているの確かに事実ですね。

高木 もうこのごろは、鉄筋にしろ型枠にしろみんなね、専門業者さんが自身でCAD使ってみんな描きますからね。積算とかみんなやりますから。

古阪 しかし、ゼネコンが親墨を出さなくなったというのはどうかだと思います。そうはいっても、現在はこれだけ分業が進んでいる。そういう中で違うやり方を模索しなければならないとは思いますが、分業体制が進んでいるという中で、施工図の扱いは総合図の問題とも絡んで複雑ですね。現在、基本的に施工図はゼネコンが描いている。一部、下請にまわしている、あるいは先ほどのお話のように、施工図屋さんに外注していることはありますが。しかし、海外ではゼネコンは図面を一切描かない。描いても仮設計画図のようなものだけです。そういう中で、日本の場合、ますます図面が設計事務所からゼネコンに降り、ゼネコンからサブコンに降りている。そして、日本のゼネコンは図面を描くのが得意になっている。そのひとつの方向として、設計図面の相互調整のためである総合図も負担するようになっていく。欧米では分業体制のもとで図面は描かないわけですから、ますます海外との乖離も生まれてきています。今のゼネコンの施工図外注のあり方は、そのあたりに解くカギがあるんじゃないかと思うんですが。

高木 そのへんは設計の問題ですよ。設計事務所が設計図を描くでしょ、それをもらって我々が施工図を描くわけですよ。ところが設計図にかなり問題があるんですよ。逆に設計図を我々に描

くことを要求してくる事務所もあるんです。

得田 天下の設計事務所であっても、総合図で最終的に図面としています。確かに意匠図と構造図とに整合性のないことがたくさんあります。日本の設計事務所は、欧米とは違ってゼネコンに甘えている部分があると思います。

古阪 結局、ゼネコンが頑張っているということですが、発注者も含めて、設計者、ゼネコン、サブコンの分担関係をどうするかという議論が必要です。今回 BCS では、新発注方式と称して、設計施工や、一式請負の中で、契約前にここまで明確にしておかないと困るといった、発注者・設計者に対して明確な主張をする動きを始めました。この中にはもちろん総合図の問題も含まれています。総合図に関しては、今までゼネコンが常に設計者から寄り切られっぱなしだったと思うんです。総合図には二つの意味があって、設計の総合調整っていう役割と、施工の事前検討っていうことです。前者は明らかに設計者の責任においてやられるべきこと、後者はゼネコンがやるべきことです。そして、両方が、本来はお互い歩み寄って描かなければいけない、それが全部ゼネコンになっている。そうすると、もしそれを是認するのであれば、新しいやり方ってものを模索しなければならない。たとえば、設計者と了解の上で、もっと実施設計に踏み込んだところまでを施工図がらみということでゼネコンがやる方式を考えると、(制度的に言えば実施設計以降をゼネコンがやる、限定的設計施工だと考えられますが)、これは関東ではたぶんできない、関西からやったらどうかかって、僕は思っているんですが。

高木 みんな正論はわかっているんですよ。ところが、実際に受注される場面になると、どうしても請負者が負けるわけで。そうでもないとなかなか仕事が取れない。

得田 双務契約がどうしても片務契約になっていますから、やっぱり請け負けのほう弱いんですよ。

古阪 そういう状況っていうのは、まだこう当分は変わりそうにない。

高木 変わりそうにないんじゃないかと。

得田 これだけパイが減ってくると、お互いに供給過剰の中で仕事を取り合いますと、どうしてもそのようなことは提供せざるを得ないところがありますな。

高木 ますます状況は悪いです。設計事務所さんもね、仕事量が半減しています。それに加えて、設計料そのものも安い。自分が自ら、請負者も一緒ですが、自らダンピングに近い価格で引き受ける。だから、もう図面を描いてられないと思います。

古阪 そのことは、ゼネコンの立場で言うと、設計・施工に近づくことで有利ですよ。そのへんはどうなんですか? 増えてるんですか?

高木 発注者から設計・施工で仕事を取りたいというのが我々としては一番にあります。残念ながら設計・施工率は三割ぐらいですけど。

得田 昔に比べてだいぶ減っています。やっぱり発注者が、ゼネコンに設計・施工で発注してしまうと、高い買い物をするという懸念を非常に持っているわけですし。発注者は設計者に設計をさせて、その設計したものの中から、何社かからの見積りを競争させて、という気持ちを常に持っておられます。設計者は設計者で、値段の安いところから選んで、値段安くとったんじゃないから、そのへんはある程度、確認申請がとおる

程度で済ませて、あとはもうゼネコンに任せるとか。中には、積算を手伝わないとか、そんな話まで出てくる可能性があります。

古阪 でも、今の話はやっぱり基本設計は設計事務所、実施設計以降はゼネコンっていう分担のほうが、よりはっきりするのかなといった感じがするんですけどね。

高木 我々には、自身が設計で基本計画からやらしてもらったほうが良いという自負があります。で、我々の会社の設計部門って言うのは、もう事務所の大きさからいうと、おそらく上から数えたほうが早いでしょう。

古阪 例えば大林さんだとももちろん鹿島さんもそうですけど、外国人建築家がやったものを、基本設計はあっちがやって、実施設計以降をやられていると。そういうやり方が、日本のやり方という、設計と施工が分離されているという形になります。実施設計まで一体としたほうが、ゼネコンにとってはいいんですけど。そのような分担にしたほうが、より現状に合うのではとそんな感じがします。

堀田 施工図っていうのは大事なんです。今外注が増えているでしょ、無駄が多くなっています。その無駄は CAD を使ってやるなどすれば、もっと減っていきます。ゼネコンは今、外注を使って施工図を描かなくてはいけない。またみんなが設計者に押し付けられているという意識があるから、どんどん膨らんでいっているんですよ。そこを断ち切らなくてはいけない。CAD もまだ使い切っていないでしょ。意匠図とか構造図を CAD で施工図に展開するというのもできていない。もっといい施工図をもっと省力化して作成することが大事であり、どういう教育を大学でするかということにかかってくるんですよ。それを実践するように大学の教育でやってもらえたら、もっとスムーズなようにいくと思いますね。

古阪 まあ施工図を大学でというのは難しいかもしれませんが、設計図面をもっと現実のレベルまで描く演習も必要があると思います。意匠図は施工図の一手前ですから、少し詳しく描くことも演習のひとつに組み込むことですね。欧米型で描けば、いまでも施工図はいらなくなるわけですから。あとは、Shop drawing、各専門工事業者の人が描く図面だけでいいわけですから。

高木 うちのね、自社設計の場合はできるだけそうしていったんですよ。設計図を、まあほとんど原寸で描くわけですよ。原寸っていうのは、実際の縮尺にあった寸法でね、あの描き入れ寸法じゃなしに。そうするとね、生産設計で施工図に移すときにね、そのまんまのデータで描けるわけですよ。設計・施工の場合はもうそれをやっていますからね。最初の図面ができていけば、施工図まで一気にいけるわけです。

堀田 僕が新入社員のときは、施工図なんてなかったですよ。大工さんは、自分の能力で加工・組み立てをやっていましたね。我々が施工図を渡すなんてことはなかった。それだけ詳しい設計図面がありました。今、それがいないから施工図を描けっていうことになっているんでしょう。

口関西の現状について

古阪 それでは、話題を産業とか、大阪のマーケットの方に移したいと思います。

高木 大阪は寒い、寒いですな。

古阪 どういうふうに今をご覧になってるんですか。一時的停滞なのか、あるいはもう少し下がっていくのか。

得田 トップの東京とあとは大阪も含めてフラットになることからすると、残念ながらそれについては反論できないですね。ただし、あの我々は実は、当社の関西と関東とを比べたら、その文化の違いがすごくあるわけですね。関東圏の文化と関西圏の文化。そのことから考えると、大阪をこのまま、一東京と残りフラットということに対して、絶対これに対抗するだけの根性は持っていると思うんですよ。ただし、これが今うまく生かされていなくて、関西からよい提案が出てこない。

古阪 京都と大阪と神戸とうまく連携してなくて、それぞれが独立した動きをしているとよく言われます。これは調子いいときはいいんだけど、調子が悪いときはぐちゃぐちゃですからね。京都の独走している企業を盛り立てる大阪があって神戸がある、。一方で大阪の何かを盛り立てる京都・神戸、こんなことが大事だと思えますが。例えば関西があって、大阪空港の再度の機能アップ、そして神戸空港。なぜこんなことになるのか。もう少し協調してほしい。なぜそういうことにならないのか。ゼネコンだけがそうという話ではありませんが。

高木 そうですよ、ゼネコンの問題だけでなしにね。まあ確かに、昭和50年くらいまでは、東京の10年遅れくらいでね、同じことをやってきましたよ、ずっと。それがだめになってきた、人と同じことをやってはよくないですね。日本の建設業界は成熟型になってきたかなという感じがしますが、それにつれてリニューアルという比率が上がっていますね。

古阪 それは例えば、長期的視野で言えばそうだと思うんですけど、例えば高木さんのところの会社がそういう方向に向かっているんですか。わりと前はメンテナンスとかりニューアルは窓際族がやる仕事という感じでしたが。

高木 今変えてきています。この1、2年で変えてきて、リニューアル部隊も増やしましたし、人材の投入もね、若い人を入れたり、優秀な人を入れたりということで、だいぶローテーションで。

古阪 堀田さんはどのように思われますか、このマーケットとかについて。

堀田 僕らの業界っていうのは、僕らが需要を喚起できるような立場にはないですね。経済の流れのその中で泳ぐしかないから、なんともいえないですね。ただ、大阪を見た場合には、都市再生とかあるでしょう、そういう分野をやってほしいんじゃないんですか。期待はしています。

古阪 去年8月に大建協の会長をやっておられる鴻池さんと座談会やってね、あの人も都市再生って。それからみると、大阪、言っちゃ悪いですけど汚いですよね。もっと何とかなるって、関西のゼネコン、これだけ知恵があって、パワーがあるから、都市再生だけじゃなくて、いろいろガンガンできるんじゃないかと思えます。それこそ関西の団結っていうことでありうるんじゃないかと。そのきっかけもまだできていない、関経連も沈滞していますよね。

得田 たまたまた田大阪府知事が、大阪都市構想ですか。とりあえず我々が思うのは、あの東京に対抗しようとする、京阪神みんな一緒にならなきゃいけないと、ということからすると、そのへんの団結というのは大きな力だと思うんですよ。また、もともと関西に持っていたいいものが、みんな外に出てしまった。日本全体にアピールできる物をたくさん持つようにならなきゃいけ

ないかなと。

高木 経済団体や府や市がいろいろやってますけど、なかなか名案がないですね。

古阪 建設投資は関西がどれくらいだという公表されたデータはないんですね、全国のものはあるんですけど。かつ、その中の用途別にいったらどのマーケットが落ちていて、どのマーケットが上がっているのか。そういう分析をしたりすることはあるんですか。

得田 まあそれはね、例えば関西のそのへんといったら、あれは毎月でしたかな、西日本建設業保証からそういうデータは出てきているんですが。



古阪 いや、だからそれは受身でみるんじゃなくて、発信するっていうことをね、建設業界が。ゼネコンっていうのは常に請け負けと言いながらね、まあある意味は金をもうけはしてきたんだけど、発信してないでしょ。それがね、ものすごく僕は悔しいです。現在、一般紙の建設業に対する不信とかやつつけてしまえていうこの感覚はひどいんですよ。それをなんとかやり返すっていうか、うまく止めにやいかんということと、本来、ゼネコンが持っている機能、果たしてきた役割をきちりと表明しなければならぬと思うんですよ。とにかく、一般の人の不信を無くすには、ゼネコンの人たちも発信しなければいけないし、一般の人に直接働きかけるということがないといけない。

高木 そうですね、なかなかいい名案はないですね。今、都市再生だとかありますけど点ですね、言ってみれば、関西、大阪だけじゃなしに京都も神戸もみんな含めた全体の懇談会っていうのはありますよ。関経連はいろいろやっていて、広域活性化なんとか委員会っていうのをやって、そのヨーロッパで成功した事例を見に行ったりして、報告をまとめました。私も1回ヨーロッパに行ってきたけど、ただ、やっていますけどそれが実現しません。なんか今は府と市が一緒になろうかっていう話とかね、大阪に国際集客都市大阪を目指して、とかいろいろやっていますが、どのようにして集客、人を集めるのかっていう方策がないんです。この間、やっとなつ梅田の北ヤードをどうするかっていう国際アイデア募集をしましたよね。この間締め切って、1000か2000というものすごい数が集まったんです。で、大阪の中央公会堂で並べてみんなに見せました、一日だけ。とりあえずどのようなものを作るかアイデア募集、でそれを今からアイデアの入選を決めて、コンセンサスができたらしらどうしていくかというのをやるんでしょうけど、あれ見ました？

得田 いや、見ていないんですけど。

高木 見られたものじゃないですよ。並べてあるんですが、正月の初詣みたいに立ち止まらなくて見てくださいという感じで。大雑把に言うと、従来型のやつから全体を堀のような形にして癒しの街

的なものにしてというもあり、大阪的なミナミの町の雰囲気を出したりするような、そんなものがありましたね。

古阪 やっぱそれは大阪ですね？

高木 大阪です。しかし、ゼネコンから言ってもね。

堀田 ブランドがないですね。ブランドを作るための発信をしないでしょう。

古阪 それはだから個々のゼネコンではなく、大建協なんですよ。大建協、京建協。要するに建設業界はまとまって発信しなきゃいけない。例えば、日本はもともとどこにいても安全だというのがあったのに、国際化する中で不幸にして外国人の絡む犯罪が多くなっている。あるいは長引く景気低迷によっても犯罪が増えている。それをどうするのかといった地域問題ですね。こういうことは、いずれ建設需要に結びつきますけど、当面はセキュリティのチェックシステムとか、ネットワークシステムとか、なんかそういうのを考えていってとか、そうすればいろいろなことが発信できると思うんですね。国民あげて総スカンくらわされているといった状況ですから、何か発信しないと。東京で超高層を見るとまだ救いはあるわけですよ、一般の人から見ると。けれども大阪とか特に京都は工事も何にもないし。

得田 まずクレーンの数が全然ね。

古阪 そういう発信が、例えばそれが大建協や京建協などで、あるいは京都大学OBでまとめられる。とにかく発信することが必要です。そういう延長にゼネコンが、統廃合も含めてさまざまなことを検討する。国も検討をはじめてます。国は統廃合をしろとは言わないんだけど、やったところには支援策を考えようとしていますよね。だから、そういういろんな競争の中で、とくに大阪がかってのナンバー2 からフラットになるのだとすれば、そこまで視野に入れてどうやるかっていうのをやらないと。設計事務所の方は、一応三団体が一緒になって・・・。

得田 ええ、それは私が大阪府の建築士会の副会長をしてるんですが、事務所協と大阪府建築士会が合併しようか、まず合同・統合しようかと。それから今は、JA と建築士会とが CPD 提案で一緒になろうかと。この間は、今の建築士会と事務所協と合同・統合の話に、建築協会の会長から話が出てたりと。東京より大阪のほうが、そういう新しいセンスの元に、何が無駄であるのかということを考えて、日本のための発信元になっています。例えば、大阪商工会議所と大阪工業会が合併したりとかね。そのあたりは、関東のメンツを大事にするところよりも、中身を重視する関西人の発想の違いかなという気がします。関東に比べると、メンツよりも中身が大事やという気はみんな持っていますから。まあそう考えると、関西の文化と関東の文化の違いでどうにかできないかと思うんですが。

古阪 東京に対抗して関西からというのは、よくいわれるんですが、あんまり美しいことではない。東京を意識することなく、関西でできることからやる、関西人の気質、地の利などを生かしてやればいい。設計業界の改組も大いにやっていただきたいと思えますね、僕も東京に行くことがあるんですけども、やっぱりせっかく我々も及ばずながら、いろんなことを考えて建築界に新しい動きを起こそうとやっているわけですね。でも残念ながらほとんど東京でやっているわけですよ。対抗するんじゃないけど、人が集まらなくて話にならないわけですね。しかし、せっかくやるんだしたら、関西発もやりたい。やはりそういうことが大学の我々のレベルでもあります。関西発っていう

のがもっとあってしかるべきだし、それが都市再生とかセキュリティ問題だけでなく様々な建設活動に対しても意見をいう、そういうようなことがもっと気楽にできる場と雰囲気が関西にできればいいと思うんですよ。

堀田 関西はビル関係が少なくなってきたでしょう。用途転用、あれをもっとしてもらったら、もうちょっと活性化するような気がします。余った土地や建物を違う用途に転用する動きがあったら活性化する気はするんだけど。なかなかないでしょう、まだ。

古阪 今、コンバージョンということで始まってはいますね。

得田 確かに需要と供給はがらっと変わってきていますから、それによって用途変更的なことは多いです。

高木 新築ばかりじゃなくてね、できたらあったほうがいいですね。

古阪 銀行もそうですね。保険屋もそうですね。統廃合があったところはみんな半分建物がいらなくなってしまったわけですから。

高木 あれに目をつけてやっていったらもっと

古阪 そんなに金はいらさないじゃないですか、アイデア出すくらいなら。いっぱいその辺に幽霊屋敷がでつつありますよ。幽霊屋敷がそのままになるとやはりそこにビニールビールが住み着きやすくなりますし、治安的にも問題が起こるわけですから、はやくアイデアを出す必要もあるでしょう。

得田 例えばさっきのオフィスビルが今みたいに減ってきているんだしたら、都心の御堂筋なんかも職住近接ということでもてはやされ、住宅に変えるという手もあるだろうし逆に御堂筋なんか規定されているのでは？御堂筋をどうするかというのは建築士会で出そうかという話は出ているんですけどね。

古阪 京都だと、マンションがごんごん町家がある町並みの中にできて、それは一方はその仕事を受けられている会社もあるわけですけども、それでいいのかということもある。個々の会社がビジネスとして仕事をされることと、文化としてそれでいいのかという観点といろいろなことがあるので、大建協として何かひとつ意見を出すとかも考えられるんじゃないですか。もちろん、京都は京都府建設業協会ですけど。

高木 京都は何かマンションを規制するようなものができたんですか。

古阪 正確ではないですが、特にこれといったものはないと思います。

高木 営業所の隣でマンションをひとつつくってるんですけど、今後そういうのがね、だいぶ規制されてくるんじゃないかという話をしていましたが。

古阪 都計審で通りにくくなるということはあるでしょうけど。

得田 それと地域協定のあるところがありますよね。

古阪 それはあります。地域協定は住居地域に多く、商業地区でどうなっているかは実態をつかんでおりません。

得田 祇園で建物つくるときはあったでしょ。

古阪 あれは伝建群保存地区だから。

得田 最近、大阪駅の裏側、大阪ヨドバシカメラのあの辺が人少なくなったね。あそこは、北側と南側は東端の地下鉄の通路一本しかなかったから、中間にできた横断歩道ははじめ、結構人があふれてるけどね。

口京都大学卒業生に対する感想

古阪 だいぶ時間がたちました。それでは今度は、大学への注文をお聞きしたいと思います。外からみた京都大学、あるいは建築学科、大学像とか研究教育とか送り出す学生とか。京都大学が送り出す学生は、最近の動きで言えば、大学の第三者評価で様々な観点から評価を受けたり、有名予備校が調査した全国建築学科の分野別ランキングが市販本として売られたりしています。そういう意味では、さまざまな媒体で外部からも見られるようになってはいますが、我らの先輩である皆さんからみて、この京都大学建築学科というのはどういうふうに見えるのか、あるいは最近の卒業生はどうか、そういうことをまずお聞きしてその後に、大学は何をすべきかということをお聞きしたいと思います。

堀田 京都大学を卒業してこういう仕事をしてるんですけど、うちの社員は優秀ですね。うちの社員の構成みてもこの卒業生本当に優秀なのが多いですよ。ただ、できる人できない人の差がありすぎるんですけど、まあ全般的に優秀ですよ。特に構造系は人材が優秀ですよ。今後どういう人が欲しいかということ、即戦力になるような人です。そういう人が出てくるような教育をやって欲しいと思いますよ。学生さんと企業との交流がないでしょ、だから知識が非常に少ない。戸惑いは結構あると思います。面接してもね、やっぱり彼らは模範的な回答しか思いつかないし、もう少し交流していったら自分がやりたい分野とか会社とかいろいろ見えてきますし、そういう意味で交流はもっとした方がいいと思います。



古阪 大学としてはプロフェッショナルスクール構想というのがありまして、いわゆる学位をとるのではなくて、実戦教育をやっていくことを中心にやるということです。これはまだ実際にやるかどうかは決まっていないんですけど。もう一つは社会人修士とか博士。今までだと、会社を辞めて修士にもどる、博士にもどるってことで、通常の内部で上がる学生とおなじ試験を受けていた。それを、社会人修士とか社会人博士という立場では民間に席を置きながら大学にはいるとか、あるいは試験もフレッシュマンとは違う特別選考でやるとか、そういうのもあるんですね。また、産学協同とか産学連携と称して、大学と民間企業がうまく連携ができるようにということを専門に考えているセンターも学内にできています。そういうところでの注文など、おありですか。

堀田 プロフェッショナルっていうんですかね、そういう構想の中で、実社会に出て行って、即戦力を期待していたんですが、施工という分野はもうすこし幅広く教えた方がいいという気がしますよ。僕らの時は、卒業の頃、施工に関して何も知らなかった。会社に入ってから、ほんとうに一から教えてもらって、

勉強しました。我々の時代でも、一人前になるのに七、八年かかってましたね。今だったら十年以上かかりますよ。覚える内容が膨大になりすぎています。もっと学校で教え込んだら成長が早くなると思いますよ。

古阪 大学で施工とか生産の講座があるところ自体まだまだ少ないんですよ。京都大学でも実際のカリキュラムでは二年生と三年生に1回ずつ、つまり、半期2コマ分しかないんです。通年で1コマにしかならないんですよ。しかも、ご存知のように、施工だけでなくマネジメントとか、法律や経済の理論・知識を教えることがますます重要になってきているわけです。一般社会からもそういう需要というのが高くなっているんですが、社会と大学の乖離というものがものすごくあることを実感しています。海外ですと、コンストラクション・マネジメント学科が、建築学科と同程度の規模で設置されているほどですから。

得田 そのへんについて私も話をしようと思っていたんですが、当大学の卒業生っていうのはプレイヤーとしてはみんなとても優秀なんですよ。でも、監督・コーチの仕事させるときに馬脚をあらわすのが結構あるんです。当大学の者はね、専門職として社会に出すのか、それともリーダーシップを発揮する部署で出すのかというのが選択肢としてある。それから、分野別で考えるとね、発注者サイドの人間にするのか、設計者サイドの人間にするのか、施工者サイドの人間にするのか、その他か、この四つくらいに分かれると思うんだけど、この中でも最低条件は建築学科卒業してるんだから一級建築士に通る程度の教育はしておいてやらないといけない。

あとは、それに発注者サイドか施工者サイドか設計者サイドかその他かということになると、当然発注者サイドになると設計者とか施工者をいかに使うか発注者のニーズをいかに受注者に伝え、管理できるかというような能力が必要になってくるし。設計者になると、構造なんかは、うちはほとんど大丈夫という話があったけれども、あとは意匠とか設備の問題がありますね。それから施工者サイドからすると、建築生産については、先ほどもありましたように現場の所長として仕事をするのに、少なくとも七年から十年はかかりますよね。そういう教育をその当時から本人が希望することに合わせてしてやらないといけない。それから、特に施工者サイドになると、サブコンの職長をはじめ、作業員を使わないといけないとなると、リーダーシップ。それからそれ以外に最近では発注、設計、施工それぞれ、建築技術だけではなく、建設経済といいますか法律の問題、財務の問題、経理の問題、このへんも選択である程度勉強できるようなものがほしい。今まで教養過程であるような憲法論とかはありますが、実際、財務とか、たとえば、法で言いますと、民法とかです。それから商法とかねこのへんの問題が必要だと思います。実際私の立場になると、このへんが全く欠けているわけで、今から思うとそういう勉強ができたならよかったです。ただし、学生の間にできることってしているんですよ。だから、将来自分で勉強したとき自分でできるような基本的な概念だけでも教えといてやりたいというのは、学校側に希望することですね。それと、先ほどおっしゃったように、分野別でいうとプロフェッショナルという考え方。それと、社会人になって戻ってきてとか、あるいは会社に籍をおいたまま勉強ができるような状態をつくっていただこうということ、産学

連携でなにかできないかと。このへんは京都大学にしてもらいたいですけど。

古阪 得田さんの意見にまったく同感です。そして、まさに今大学でも、日本建築学会のレベルでも議論されていることでもあります。たとえば、今、J A B E E というのがあります、これは簡単にいうと、工学系教育の水準を一定以上に保つために、各大学が教育内容に関して J A B E E の審査を受け、認定をしてもらうという制度です。賛否両論がありますが、京大建築学科でもそれを受診する方向で動いています。内容的には、建築には設計、生産、構造、環境の4つのコースがあり、それぞれに必要な教育内容・教育時間等が定められています。大学教育も今過渡期でして、優秀な研究者を育てることと同時に、実践的教育が求められているんです。

堀田 ただね、京大は施工の就職希望が少ないですね。応募してくれるのはほとんど意匠、構造ですね。

高木 資質ですよ、必要なのは。今、専門的なものも多少欲しいって話がありましたけど、(懐から紙を取り出して)これ建築系職員の採用についてということで、うちの東京本社がどういう人間が欲しいかということをご簡単にまとめたものですけども、あんまり専門知識なんかは要求していません。うちはまず一番にね、学校の成績よりも将来のリーダーとなれるマネージャーとしての資質。あとはね、贅沢な要求かもしれないけど、広い視野と、高い社交意欲。要するに明るく、前向きで、賢く、タフなやつ。明るくというのは広い視野と高い社交意欲。前向きというのは高い理想とそれを実現する行動力。賢くというのは論理的思考能力と臨機応変な対応力。タフなというのはストレスに強いということ。ただ、中には設計だとか技術研究所だとかは別の枠にしているんですよ。そういう人はそういう目で見ないといけないということで、深く物事を追求する力。これは根気強い思考能力ということです。それと、ゼロから何かを作り出せる力、創造性ですね。こういうことをできれば要求している。ということで、学校の成績なんかは全然要求してないですよ。

得田 基本さえあれば、あとはOJTで教えるわけでしょ。

高木 ということですよ。質がまず必要だと。素質を見抜くと、明るく、前向きで賢くタフなやつがほしいと。それからまあ、生産系はどちらかという学部卒がいい。学部卒、大学院卒は区別していないけど、今は半々くらい。院卒が二十年くらい前から増えてきている。設計希望がずいぶん増えて現場希望が少ないという年があったので、設計希望で入る人も適性次第で現場にまわされるかもしれないと断っている。

古阪 企業が一から育てるとというのが体力的にもたなくなっているんで、ある種の即戦力が求められている。全ての分野での即戦力は求められていない。とにかく一芸を身につけてもらいたいというニーズはでてきている。会社に入ってからある分野だけを集中的に勉強するということもある。

高木 技術者、設計部門はそうですが、生産系、生産支援は学校で教育されるわけじゃないからOJTで学習してもらおう。

得田 先ほど七年ほどかかるというお話がありましたけど、我々ゼネコンに比べ、専門工業者は割りと早く一人前になれるんです。ストレスに強いタフなやつはうちの卒業生に少なくなりました。自分のことでなんですけど、学校の勉強はほとんどせずアイスホッケー部を卒業したも同然で、そういう点ではタフなつ

もりです。プレイヤーとしては優秀ですが、タフさという点では弱い者が多くなりました。うちの卒業生はプレイヤーとして優秀なので現場で所長になる。すると、ストレスがどんどん入り、ノイローゼになることが多かった。デスクワークは得意でも、現場になると苦手の様子。近隣住民やその筋の人が押しかけてくることもあるわけです。そういうストレスにもすごく弱い。

古阪 それは京大生だけですか？

得田 いや、全体的にそういう傾向です。特に偏差値の高い学校の生徒の中に、確率的に多いです。逆に、偏差値の高くない、あるいは高校時代あまり勉強していない連中は運動クラブで鍛えられて精神的にタフなやつは結構多いですよ。うちの卒業生でも運動部にいたものは結構タフで、みんながんばっています。

古阪 今、内部的に見ると、女性が結構多いんです。一割から一割五分くらい。現に三回生の女の子は現場に行きたいという子もいます。

得田 うちも見学に来ました。

古阪 何社かまわったみたいですが、会社の方からやめた方がいいと言われたことがあったようです。まだそういう古い体質が残っているみたいです。構造や意匠と違い、女性が現場に行くことに対し抵抗感が残っているんでしょうか？



得田 昔はトンネルに女が入ったら事故が起きるのでいかんというのありましたね。

高木 今でも山の神を怒らすという考えがあるみたいです。

得田 構造か、意匠。やはり設計部に入ることが多いですね。

堀田 うちも設計は多いですが、施工は少ないです。

古阪 高木さんのところでは、うちの卒業生は他の大学の卒業生と比べてどうですか？

高木 さあ、全体で3ないし4%くらいおられますか、先ほどからお話していますようにみんな優秀ですよ。素直で、なかなかいいですね。

古阪 得田さんのところはいかがでしょう？

得田 現在は最近(京大出身者が)いないんですけど、50年代後半に何人か入ってきました。みんな優秀ですよ。ただ、その中で一人だけ途中でノイローゼになってしまいました。ただ、それは原因が解決したということもあり、いまは設計の課長をしていて非常に優秀です。彼が設計すると顧客からのクレームが全くない。しかし、部下の使い方をもう少し何とかして欲しいというのはあります。他のケースで言いますと、現場所長をしているものがありますが、人前で喋ったり、強いリーダーシップを発揮するというに弱いという気がします。阪大、神大、あるいは私大の連中の方が建築部という部門を引っ張っていく

リーダーシップに長けているような気がします。

□大学への注文

古阪 時間が少なくなってきました。大学にもう少ししっかりして欲しいという点がございましたらどうぞ。できれば簡潔をお願いします。

高木 先ほど京大建築学教室にどんなイメージをもっているかというお話がありましたが、特にこれといったイメージはないんです。彼らがどんなことをやっているかということはありません。一般のメディア、あるいは専門のものにも出てこない。だから、もっと学校の方も積極的に発言してもらいたいと思います。

得田 学校がどうの、教育がどうの、という話は今のままでいいと思います。日本に数ある大学の中でリーダーシップを発揮していく立場であり、しっかりして欲しい。我々京都の立場からするとすぐ東の方を見てしまうから、東にだけは負けてほしくない。特に私は関西生まれの関西育ちですので、アンチ関東、アンチ東大ですから、もっと京大がリーダーシップを発揮して欲しいですね。

堀田 建築をやる上では施工は大事だと思いますよ。ゼネコンに魅力を感じる教育をしてもらいたい。ゼネコンに人材が集まるような教育をしてもらいたい。我々も悪いんでしょうけど。

得田 一時は、設計かゼネコンか、行政にしか行かない時代がありましたね。それが最近ではゼネコンには来ないで設計事務所か信託銀行やディベロッパーといった発注者サイドが多い。

高木 ゼネコンに来てもらうためにはまず施工に魅力を感じてもらわないといけない。

古阪 設計は演習がありますが、生産は演習がなくてみせる機会が少ないんです。事故・保険の問題、場所的に移動の問題、現場に迷惑がかかるという問題があります。今は年に二、三回現場見学を企画していますが、平日は授業と重なるから土曜に行きます。

高木 私も大阪の大学で講師をしていましたが、半日使って現場見学しました。

古阪 現場との交流は大事にしていくべきだと思います。

高木 他の分野の方と交流していると、物を造る喜びがあっという間ですね、と言われるんです。だから、学生のときにそういう気持ちになっていただけたらいいと思いますね。

得田 現場を持つと、その現場には何年か通うことになる。そうするとその土地に対して愛着をもつ。家具なんかは部屋にはいっていかないと見られないが、建物は自分が苦勞して造ったものを外からみることができる。地図にも残る。そんな楽しみがあると盛んに言っているんだけど、どうもあまり伝わっていない。

古阪 この前、台湾から社会人、学生がやってきたんですけど、現場説明会で質問を募ったところ、台湾の学生は打ち切るまで延々と質問を浴びせかけてくる。一方うちの学生は誰も質問しない。なんで聞かないのって尋ねると、そんなの日本の習慣じゃないでしょ、って言うんです。

得田 台湾からの留学生の彼ですか、あの人はよく質問しましたね。

古阪 国が今どういう段階か、ということもあるでしょうし、日本人気質というものもあるでしょうし。しかし、議論をすること、わからないことを素直に聞くことの訓練はやはり必要だと思います。

得田 やはり、私費で高い金を出して来ているんだから、それだけ吸収していかないと損だということもあるんでしょうね。

古阪 彼だけじゃなくて、引率してきた学生20数人がみんなそうなんですよ。

そろそろ予定の時間です。

得田 なんか雑談で終わってしまいましたね。

古阪 いやいや、貴重な雑談でした。重要なことは、企業においても、業界団体においても、大学においても、もっと発信をしないといけないということ、そして、卒業生だけではなくてですが、実業の世界と大学がもっと積極的に交流すべきだということではないかと思いました。長時間ありがとうございました。

2003年2月27日京都大学工学部建築学科会議室にて収録